

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル：「チュルク諸語における膠着性の諸相－音韻・形態統語・意味の統合的研究－」

(第2回研究会)

日時：平成29年10月7日(土) 14:00-18:00

場所：AA 研大会議室 (303)

報告者：佐藤久美子 (国立国語研究所)

(1) 菅沼健太郎 (AA 研共同研究員, 九州大学)

「チュルク諸語の韻律類型論に関する予備的考察」

本発表の目的は以下の2つであった。

- [1] チュルク諸語はこれまで語末音節にアクセントがあるという共通点が指摘されてきたが、チュルク諸語間の韻律に異なる部分があることを、1. 語レベルの韻律、2. 文レベルの韻律に着目しながら示した。
- [2] チュルク諸語 (本発表ではトルコ語、現代ウイグル語、エスキシェヒル・カラチャイ語の3言語を対象とした) を Igarashi (2012) の韻律類型論に従い分類した。それを通して、以下の表のように各チュルク諸語が日本語諸方言と共通性があること、韻律体系にバリエーションがあることが示された。

言語名	[±lexical tone]	[±multiword AP]
i. 東京方言、福岡方言、 <b>トルコ語</b>	+	+
ii. 小林方言、 <b>現代ウイグル語</b>	-	-
iii. 大阪方言、鹿児島方言 <b>エスキシェヒル・カラチャイ語</b>	+	-
iv. 郡山方言	-	+

※日本語の諸方言は Igarashi (2012) により挙げられたものである。

本発表、ならびに質疑応答を通して、Igarashi (2012) の類型法をチュルク諸語にそのまま当てはめることの妥当性の是非などの、今後の課題が浮き彫りとなった。今後十分考慮していかなければならないだろう。

(2) 新田志穂 (AA 研共同研究員)

「現代ウイグル語の形動詞－音調的な特徴に着目して－」

現代ウイグル語において、形動詞は様々な統語的位置に現れうる。本発表では特に、(1)形動詞が名詞修飾節末に位置する場合と、(2)形動詞が主文末に位置する場合とに分け、その音調的な違いについて考察した。そして、(1)においては、形動詞の最終音節内でピッチの上昇・下降が見られるが、(2)においては、形動詞の最終音節内でのピッチの上昇は見られるものの、(1)に見られるような下降

については観察されないことを示した。

本発表に対して、語順に操作を加えた場合やそのほかの品詞の場合についても、その音調を考察する必要があることや、統語的な規定以外に、接続形／言い切り形といった見方で観察できることなどが、参加者により指摘された。また、形態的な側面（主文末の形動詞に付けられる人称要素）に関するコメントもあり、チュルク諸語内でバリエーションがあることが確認された。

(3) 大崎紀子（AA 研共同研究員，京都大学）

「チュルク語補助動詞についての研究ノート」

中央アジアやシベリア地域のチュルク語では 20 個を超える補助動詞が用いられているが、本発表では、まず、チュルク諸語北西・南東・北東グループの 7 言語（キルギス、カザフ、タタール、ウズベク、ウイグル、ハカス、サハ）の補助動詞のリストを提示し、言語間に見られる共通点と相違点を観察した。特に、「持続、継続」を表す四つの同源の補助動詞が共通して用いられているものの、文法化の程度に違いが見られたり、また、同源の補助動詞がある言語では「継続」を表すのに対して、別の言語では「始動」を表すなど、意味・用法に違いが見られることを述べた。さらに、補助動詞が重複して用いられる場合（語彙動詞 V1＋補助動詞 V2＋補助動詞 V3 のように三動詞が連続する場合）の収集中のデータを披露し、V2、V3 への出現可能性によって補助動詞を分類できるのではないかという試案を示した。

(4) 佐藤久美子（AA 研共同研究員，国立国語研究所）

「国際シンポジウムに向けての打ち合わせ」

次回開催予定のシンポジウムについて、セッションのテーマ等について意見交換を行った。

参加者は 22 名（所員・共同研究員 13 名、コメンテータ 3 名、外部参加者 6 名）であった。それぞれが専門とする言語・分野の見地からコメントを述べ、活発な議論が行われた。